氏　　名（本籍地）	三　浦　節　夫（東京都）		
学　位　の　種　類	博士（文学）		
報告・学位記番号	乙第216号（乙文第86号）		
学位記授与の日付	平成27年10月26日		
学位記授与の要件	本学学位規則第３条第２項該当		
学　位　論　文　題　目	井上円了の研究		
論　文　審　査　委　員	主査　教授	博士（文学）	渡　辺　章　悟
	副査　教授		伊　吹　　敦
	副査　准教授	博士（文学）	岩　井　昌　悟
	副査　教授	博士（社会学）	柴　田　隆　行

標記対象論文「井上円了の研究」は、井上円了記念学術センター専任研究員、井上円了研究センター研究員などとして長年に亘って井上円了の生涯と思想を研究してきた三浦節夫氏の円了研究の集大成と言える論文である。

全体は序章と六章からなる本論、及び終章の八部構成であり、最後に付された資料編も含め、A4二段組みで900頁を超える大著となっている。まさに円了研究の第一人者に相応しい浩瀚な論文になっている。以下にその目次をあげよう。

序章　問題の所在

第一章　長岡時代

第一節　生家・慈光寺とその家族

第二節　青少年期の思想

第二章　東京大学時代

第一節　東本願寺の教師教校英学科

第二節　東京大学時代の軌跡

第三節　東京大学時代の論文

第四節　哲学館創立の決意

第五節　思想の核心の発見と著述活動

第六節　『真理金針』と『仏教活論』―新しい仏教論

第七節　『真理金針』と『仏教活論』に関する論評

第八節　『哲学一夕話』―現象即実在論

第三章　哲学館時代

第一節　私立学校・哲学館の創立と難治症

第二節　第一回の世界旅行の日録

第三節　哲学館の危機と勝海舟

第四節　妖怪学の提唱

第五節　妖怪学の思想

第六節　博士論文『仏教哲学系統論』について―井上家から寄贈された原稿をめぐって

第七節　『外道哲学』―インド哲学の研究

第八節　井上哲次郎との思想対立―哲学館事件の背景として

第九節　哲学館事件と大学からの引退

第一〇節　哲学館事件・新説

第一一節　大学引退の原因・再考

第四章　全国巡講時代

第一節　全国巡講

第二節　哲学堂の創立

第三節　『哲学新案』―相含の論理

第四節　世界旅行

第五章　遺言

第一節　公開遺言状

第二節　逝去後の遺言状

第六章　理念と思想

第一節　護国愛理の理念

第二節　宗教思想

第三節　哲学思想

第四節　著述と略年譜

終章　結論と課題

第一節　結論

第二節　課題

付録一　哲学館事件文献年表

付録二　全国巡講一覧

付録三　東アジア巡講一覧

付録四　東洋大学・円了文庫（洋書）目録

これらを概観すると、最初の序章「問題の所在」においては、本論文の目的を説明し、円了の生涯と思想に関する先行研究を概観しつつ、円了の生涯についてはこれまで「実証的な研究や全体像の詳細な研究」がなされてこなかった事実を指摘する。これは本論文において初めて為されるものであるという三浦氏の自負が読み取れる。

次いで円了の生涯を時系列に沿って、「第一章　長岡時代」、「第二章　東京大学時代」、「第三章　哲学館時代」、「第四章　全国巡講時代」、「第五章　遺言」と五つに分けて論述している。これらの章ではそれぞれの時期になされた出来事の詳細を検討しつつ、それぞれの主な著作について論じている。

特に「第二章　東京大学時代」では、円了が歴史の表舞台に登場し、加藤弘之、フェノロサ、外山正一から西洋の哲学を系統的に学び、自らの思想を確立してゆく状況が明らかにされている。本論の記述は、最近になって研究された59冊にも及ぶ洋書からの抜き書きからなる円了の研究ノート『稿録』によって、判明したものであり、近年の三浦氏と彼が博論を指導したライナ・シュルツァー氏の研究成果である。これは円了の著作の背景を明かしたものとして大いに注目される。

本章の第五節から第八節までは、まさに円了の思想が、『仏教活論序論』『真理金針』『仏教活論』『哲学一夕話』『哲学要領』となって花開いてゆく状況を分析し、円了が当時の宗教界、思想界において果たした役割、西田幾多郎等に与えた影響などについて言及している。

第四章の「全国巡講時代」は円了の提唱した修身教会運動と哲学館の創立、三度に亘る世界旅行とそれがもたらした結果について紹介しているが、この巡行の経緯や規模を初めて明らかにしている。また、三回の世界旅行に関しては、現在の国際化に先駆けて、世界を歩いた先駆者としての円了を知る良い資料となっている。

第五章の「遺言」は、公開遺言状と逝去後の遺言状という二つの遺言によって、円了が学校と哲学堂を子孫に世襲させず、財団法人にした経緯を明らかにしている。

次いで「第六章　理念と思想」では、「円了の一生を貫いた理念」として護国愛理を扱い、急速な日本の近代化の中において、その理念がどのように具体化され、また変化していったのかを、『仏教活論序論』から分析している。さらに、宗教思想と哲学思想について、先行研究を引用しながら批判しているが、この記述に関してはさらに深い分析が求められるであろう。

最後に「終章　結論と課題」であるが、本章は円了の生涯を、長岡時代から東京大学時代、哲学館時代、全国巡講時代と四区分し、俯瞰した上で、残された課題を提示して論文を締めくくる。ここで三浦氏も述べているように、本論で残された課題は、晩年の業績と思想である。特に思想を掘り下げた考察は、三浦氏本人も述べているように必ずしも充分とは言えない。しかし、こうした点を除けば、本論文によって当初の目的のかなりの部分

は果たされたと言えるであろう。

また、本論に付された四つの附録「哲学館事件文献年表」「全国巡講一覧」「東アジア巡講一覧」「東洋大学・円了文庫（洋書）目録」は、三浦氏にして初めてなし得た労作であり、それぞれが貴重な資料となる。これらは、今後の井上円了研究で必須の文献となるであろうことは疑い得ない。

本論文の中でとりわけ貴重な業績としては、「明治十七年秋、井上円了の東本願寺への上申書（下書き）」の翻刻と分析があげられる。これは哲学館創立の原点を明らかにしているもので、この分野にかかわる者にとって必読のものであろう。また円了の初期の論文の『哲学要領』と『真理金針』の単行本化以前の書誌情報を詳細に示し、普及の媒体となった新聞・雑誌の性格と発行部数を吟味することを通して、社会的にどの層に円了の初期思想が受容されたのかを明らかにしているところなどは、社会学を研究の土台にする三浦氏が真骨頂を発揮しているところであろう。

また、随所に提示される円了の事績に関する新資料は、読むものを驚愕させるほど、広く詳細で厳密なものである。例えば円了の三度に亘る世界旅行での活動や人的交流などが、書簡や書評、新聞などを渉猟して再現されており、これまでに誰もがなし得なかった研究成果がちりばめられ、円了研究の第一人者と呼ぶに相応しいものとなっている。

しかしながら、全体として見ると、三浦氏の論文は社会学を土台にする為であろうか、客観性を重んじつつ、正確な情報の提示に比重が傾いているとも言える。特に第六章の円了の宗教思想と哲学思想を扱っているところでは、これまでに提出された種々の説を対照し綜合するといった傾向が強く、円了の思想自体を掘り下げ、また他の思想家との比較による分析を行うという試みはあまり見られない。その点の考究はもっと求めたいところであった。

だが、それは方法論の違いでもあり、本論文の構成からしても困難であったかもしれない。さらにいえば、それは本論文が博士の学位に値しないとするほどの難点でもない。むしろ、本論文の価値は井上円了に関する基礎資料の収集、整理に長年従事してきた三浦氏にして初めて可能となった井上円了研究の集大成という点であり、現存する関連資料のほとんどすべてを使い尽くして書かれた、詳細で緻密な井上円了の綜合的研究となっている。この点にこそ筆者の面目があると認められる。

また、この大著の内容は、今後井上円了の業績を研究する者にとっては参照不可欠の文献となっていることは間違いない。これを土台にして井上円了研究をさらに先へ進めたり深めたりすることはできるとしても、これと同等のものを再現できる研究者は三浦節夫氏を置いて今後も現れえないと思われるほどの出来映えである。

以上、確実な資料批判と分析とを併せてもつ本論文は、文学研究科（インド哲学仏教学専攻）の博士学位審査基準に照らしても、妥当な研究内容であると認められる。したがっ

て、本審査委員会は全員一致を以て三浦氏の博士学位請求論文は、充分に学位授与に値すると判断する。